指導計画案

展開	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
導入	1 作品全体の展開を大づかみに捉えさせる。	① 全体を一読し、初読後の印象を共有する。	① 平凡な日常を切り取った小品のような導入から、訪問者たちの来訪によって「彼」の静かな休日だけでなく、「彼」が意識すらしてこなかった常識があぶり出され、それらの根拠が脅かされていく。この不穏さとおかしみが同居する作品であることを最初に理解させたい。一読後の第一印象として、訪問者たちと「彼」のそれぞれに対する違和感を表明する生徒も出てくると推測されるが、なぜそうした感想が生まれるのかということそれ自体にも目を向けさせたい。
	2 登場人物が置かれた状況や人物像をつかませる。	② 「彼」の状況や人物像を捉える。	② 状況については、日曜日の日中であること、人物像については、勤め人であり、新居を購入したばかりであること、同居人の有無には言及がないが、おそらく独居していることを押さえつつ、ざっくばらんに意見を交換するなどできればよい。
		③ 物語内時間に着目し、段落分けの根拠を考えながら全体の展開を捉える。思判表	③ 本文は日曜日の午後のごく限られた時間を描いており、そうした現実的な時間は大きく動かない一方、「彼」の気付きや記憶がストーリーを駆動する力を生み出している。この点に着目して場面展開を考えさせる。
展開	1 語句の理解から、文意を確認させる。	① 〈第一段〉（初め～二一三・3）語句の理解、文意の解釈を進める。知技	① 現代日本の住居において、ブザーを見る機会は少なくなっている。ブザーとはどういう形状で、どのような音が鳴るのか、ベルやインターホンのチャイムとどう異なるのかといったことを確認させる。また、茶の間、台所、土間など、この段落に登場する言葉から、「彼」の家や昭和三十年前後の新築住宅に対する理解を促す。
	2 人物像を捉え、事件の経過を把握させる。	② 「彼」の心情の動きを把握する。思判表	② 冒頭からブザーの音を「重苦しく」（二一一・1）聞く「彼」の心理や、「腹立ちの対象」（二一一・10）、「えたいの知れぬ狼狽」（二一一・16）の理由などは特に重点的に理解させたい。
	3 実際の時代状況を踏まえ、物語内部の諸設定を理解させる。	③ 写真班の二人の人物像を捉える。思判表	③ 顎鬚とイガクリの関係や、顎鬚の発言と態度を踏まえ、二人の登場によって「彼」にどのような不安がもたらされているかを考えさせる。
	4 訪問者たちと「彼」とのそれぞれの論理の違いを理解させる。	① 〈第二段〉（二一三・4～二一五・8）写真班の立場を確認する。知技	① 「金融公庫住宅資料調査社」（二一三・5）という会社は実在しないが、「金融公庫」や「住宅金融公庫」（二一五・7）を調べさせることで、写真班の二人の背景や、横柄な態度を根拠付けるものについては説明可能になる。

展開	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
展開	5 「彼」の不安の内実や、その前提となっている事柄を理解させる。 6 作中に込められたモチーフの象徴性を理解させる。	② 顎鬚の言う「責任」や「義務」と「権利」の内容を整理する。思判表 ③ 「彼」が置かれた状況を理解する。思判表	② 顎鬚たちがなぜ家の写真を撮るのか、家はなぜ撮られねばならないのか、「彼」はなぜ撮影を拒めないのか、といった複数の観点から、顎鬚の主張を捉えさせる。その上で、「あんたはまるまるあんただからだ。ところがこの家はそうではない」（二二五・2）という顎鬚の断定を手掛かりに、住居とそこに住む人との関係や、住むことを可能にする条件についても意見を出し合わせたい。 この段落では顎鬚たちに一方的に押されている「彼」の姿が顕著だが、その中でも「何か言おうと思う」（二二五・4）と「彼」の意思それ自体は確実に認められることと、一方で「言うことが見つからない」（二二五・5）という不如意な状態にあることを見逃さずにおきたい。
		〈第三段〉（二二五・9～二二八・8） ① 電気屋とのことを思い出す契機を確認する。知技 ② 「彼」の家の規模をつかむ。思判表 ③ ブザーをめぐる「彼」と電気屋の考え方の違いをまとめる。思判表	① 回想の導入として、同一あるいは類似した出来事を書き込むという方法は常套だろう。ここでは玄関で靴を脱ぐという行為が、写真班と電気屋とを結びつけている。 〈第一段〉以上に家の様子が鮮明に描かれるのがこの段落の特徴と言えよう。「十四五坪程度のコマギレ住宅」（二二六・4）、「ベルを取り付けるには家が小さすぎる。」（二二六・10）といった電気屋の言葉から、「彼」の家の様子を改めて確認させたい。 「彼」は来訪者の肉声によって、その性格を見通したいと言うが、電気屋は来訪者の声がけを訪問者に不要な労力を強いるものと見ている。つまり、「彼」はあくまで家の居住者としての観点から述べているのに対し、電気屋は居住者の意図や立場を無視し、来訪者の立場から、かつ、損得という観点によって主張を述べている。電気屋の商売から見れば、この方法は客の主張の論点をあえてずらし、自分の都合を叶えるための手段となっている。これらの点を整理させたい。
		〈第四段〉（二二八・9～二三〇・15） ① 「彼」が気付いた内容をつかむ。思判表 ② 写真班と電気屋の共通点を整理する。思判表	① 「（つまり俺がまごまごと押し戻されてしまうのは――）」（二二八・9）に始まる「彼」の思惟を辿り、家と人との関係をまとめさせる。あわせて、これまでの「彼」に不安をもたらしてきたものの正体が、経済を前提とした所有のシステムにあることにも目を向けさせたい。 写真班と電気屋とがともに「彼」の意見だけでなく、存在そのものを半ば無視していること、それが「彼」の発言の核心を酌もうとは一切しない、意図的にコミュニケーションを不成立とするようなやり方によって達成されていることを理解させる。

展開	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
展開		③ モリソバの象徴性について考える。思判表	③ 冒頭以来影を潜めていたモリソバが、〈第四段〉で主要なモチーフとして前景に出てくる。モリソバが「彼」にどのような気持ちを喚起させるかを確認すると同時に、改めて、日曜日の昼にモリソバを食べるという設定の卑近さに目配りしつつ、モリソバが何を象徴するかを考えさせる。仮に日常そのものの象徴とするならば、モリソバが「彼」の口を塞いで声を出させないようにするという結末をどう理解するか、意見を出し合わせたい。
まとめと発展	1 全体のまとめをして、主題について考えさせる。 2 読書活動、言語活動への発展をはかる。	① 作品の主題について考える。主態 ② 表現上の特色を整理する。知技 ③ 作者とその作品に即して読書指導、言語活動への発展をはかる。思判表	① 社会生活を送るなかで、当然皆が了解していると普段は意識すらしてこなかった事柄も、実は一定のルールに則って成立している。そもそも、自己を取り囲んでいる他者そのものが、実は了解不可能な存在としてせり上がってくる瞬間もあり、そうした世界に私たち一人ひとりが置かれている。ルールを共有できなければその他者は容易に自己の存在を脅かす。そうした基盤の不確かさと規範のあり方に気付かせる。 ② 主題にはシリアスな問題も込められているが、一方でこの作品には滑稽さもある。それをもたらす要素をおさえる。作中人物どうしのやり取りのズレもその一つだが、表現にも着目したい。たとえば、この作品には風景描写に心理描写を重ねるタイプのレトリックはそれほど見られないが、「彼」の心内語を丸括弧で括ることで、来訪者たちが勝手に動き回っている脇で、「彼」が内省に耽っていると読むことができる。発話の長短もメリハリが利いており、テンポがよい。こうした作中を流れる時間の速度を乱さないための工夫が、読者を引き込み、滑稽さを誘う。 ③ 梅崎春生の文学的営為と「市井事もの」を学習させつつ、読書指導においては安部公房「闖入者」やカフカ「城」などを紹介することで、他にも類似したテーマの文学作品が多くあることを示す。